

研究主題「作品に対する、自分の見方や感じ方を広げるための指導の工夫」

東京都教職員研修センター 研修部教育開発課
八王子市立松枝小学校 教諭 渡邊 雄介

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月）において、図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」が必要と示されている。また、図画工作科の見方・考え方である「造形的な見方・考え方」については、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと。」と小学校学習指導要領解説図画工作編（平成29年7月）で解説されている。

一方、「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）」（国立教育政策研究所，2011）では、児童・生徒の「授業で学びたいこと」において表現への偏りが見られ、「平成24年・25年度学習指導要領実施状況調査」（国立教育政策研究所，2014）では、表現と比べ、鑑賞に肯定的な回答は低く、自分の印象や情景、全体的な感じなどを、形や色、動きや奥行きなどの複数の造形的な特徴を根拠に説明することについては、一部課題があることが指摘されている。加えて、「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査の結果について（図画工作）【速報版】」（令和6年7月）においても、形や色などの造形的な特徴である、動き、奥行きを理解することに課題があることが示されている。このことには、鑑賞活動に対する指導や支援への必要性が示唆されていると考える。これら背景を踏まえ、本研究では、以下のように研究主題及び育てたい児童像を設定し、児童の鑑賞活動時における指導の工夫を検証することとした。

○ 研究主題

「作品に対する、自分の見方や感じ方を広げるための指導の工夫」

○ 育てたい児童像

「作品の形や色などの感じから、自分の見方や感じ方を広げることができる児童」

第2 研究仮説

教師が児童の鑑賞活動時における指導の工夫を行うことにより、児童は作品の面白さや楽しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 概要

○ 鑑賞の指導、支援に関連する先行研究、鑑賞者の認知に関する先行研究、授業実践に関連する先行研究から、鑑賞活動に対する指導や支援への課題を整理した。

(2) 結果

○ 先行研究では、作品を鑑賞する鑑賞者の視覚認知においては、美術教育歴による見方の違いが明らかになり、鑑賞の初心者者の視覚認知は限定的であることが示唆された。また、認知的側面に応じた適切な指導、支援の必要性が明らかになった。

○ 表現の指導が充実する反面、鑑賞の指導が行き届かない課題が、先行研究から指摘されていた。また、知識偏重型の鑑賞教育への課題、対話型鑑賞等の鑑賞者主導の鑑賞活動への偏りについても指摘されていた。

2 調査研究

(1) 概要

- 所属校の児童に対する「鑑賞活動への意識」に関連する質問紙調査の実施と課題の分析
 - ・ 調査対象：八王子市内小学校 第3学年児童 40人、第4学年児童 47人
第5学年児童 58人、第6学年児童 50人 計 195人
 - ・ 実施期間：令和6年7月16日（火）から31日（水）まで
 - ・ 実施方法：WEBアンケート
- 八王子市の図画工作科教員に対する「鑑賞活動への意識、鑑賞活動時の指導の工夫」に関連する質問紙調査の実施と課題の分析
 - ・ 調査対象：八王子市内小学校の図画工作科教員 33人
 - ・ 実施期間：令和6年7月16日（火）から31日（水）まで
 - ・ 実施方法：WEBアンケート

(2) 結果

- 所属校の児童に対する「鑑賞活動への意識」に関連する質問紙調査の結果
 - ・ 「図画工作の授業でどのようなことを学びたいですか」、という択一の質問では、「アイデアを考える」37%、「描く、作る」54%、「作品の見方」3%と、表現と比べ作品の見方を学びたい児童は少ないこと（図1）、44%の児童が日本や世界の作品を見る機会が少ないと回答していることが明らかになった（図2）。
 - ・ 鑑賞に関連する項目では、「形や色などの感じ（温かい、冷たい感じなど）が分かること」ができていないと考える児童（9%）と比べ、「形や色などの感じから、自分のイメージをもつこと」ができていないと考える児童（18%）が9ポイント多いことが明らかになった。また、第5、6学年においても、関連する項目について、できていないと考える児童の割合が増加し、教員の指導に課題があることが明らかになった。

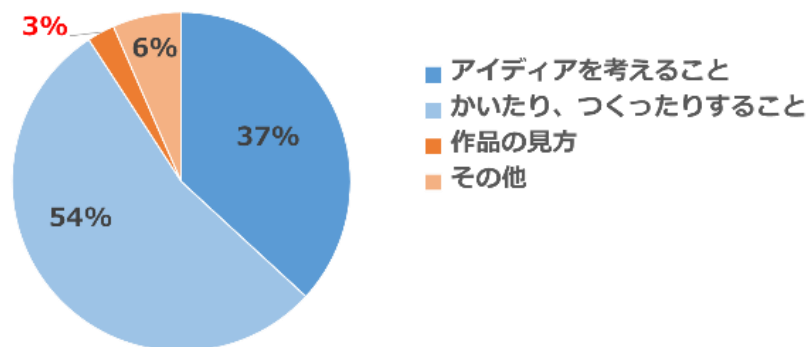


図1 図画工作の授業で、どのようなことを学びたいですか

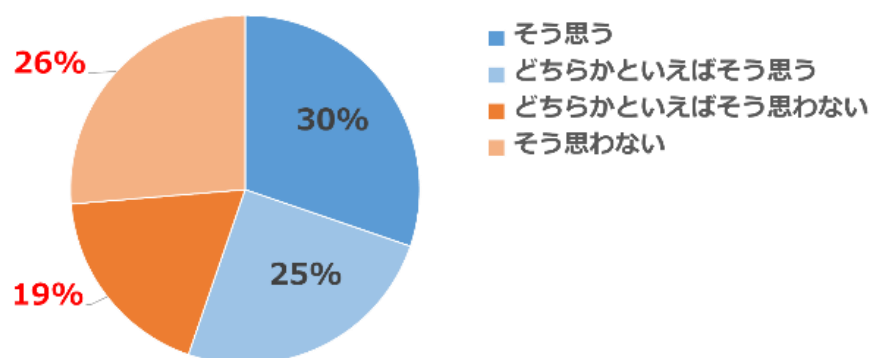


図2 図画工作の授業で、日本や世界の様々な作品を見ることがありますか

○ 八王子市の図画工作科教員に対する「鑑賞活動への意識、鑑賞活動時の指導の工夫」に関連する質問紙調査の結果

- ・ 「児童が日本や諸外国の様々な作品を鑑賞するように指導を工夫していますか。」という質問では、46%の教員が「どちらかといえばしていないほうだ（42%）、していないほうだ（4%）」と回答していることが明らかになった。
- ・ 「鑑賞活動について、具体的にどのような指導の工夫を行っていますか。」という質問では、児童作品の鑑賞活動は活発に行われているが、日本や諸外国の作品をとりあげた鑑賞活動は少ないことが明らかになった。

3 開発研究

(1) 概要

○ 分析結果から明らかになった課題及び先行研究の示唆を踏まえた指導法の開発を行う。

(2) 内容

○ 指導法の開発

先行研究から作品鑑賞時の鑑賞初心者の視線は、特定の箇所に集中しやすい傾向があることが明らかになった。以上の研究主題及び育てたい児童像、基礎研究、調査研究の背景を踏まえ、指導の工夫を3点設定した。

※（）内は指導の工夫の概要

指導の工夫①：児童が作品の関心の高い場所にシールで印をつけ、視点を可視化し、作品を客観的に把握できるよう支援すること（視点の可視化）。

指導の工夫②：鑑賞中や制作中に作品の認識しづらい場所について、シールやICT機器の活用により焦点化し、鑑賞を支援すること（焦点を絞って作品鑑賞）。

指導の工夫③：ICT機器を活用し、鑑賞作品をいつでも見ることができる環境を作り、作品の形や色などの感じをより細かく鑑賞できるよう支援すること（ICT機器で作品鑑賞）。

○ 指導の工夫に関するパンフレットの作成

指導の工夫の実践例をまとめたパンフレットを作成する。

4 検証授業

(1) 概要

○ 開発した指導法を取り入れた検証授業を所属校にて2回実施

- ・ 実施日：令和6年9月11日（水） 第3学年1組20人

令和6年9月18日（水） 第3学年2組20人

- ・ 題材名：「見つけて、考えて、伝え合おう」 B鑑賞（1）ア 共通事項（1）ア、イ
- ・ 内容

生き物や風景が描かれている抽象画を鑑賞作品として取り上げ、授業の導入では、児童が作品の中の関心の高い場所にシールで印を付け、視点を可視化し、他人の見方や感じ方を視覚的に把握する。把握した視点を基に、個人で ICT 機器を活用しながら、作品の詳細を鑑賞し、生き物や背景の形や色などの感じを基に、自分なりのイメージをもって、絵を描いたり、話し合ったりする。授業の終末では、活動を通して気付いたことや想像したことを基に、関心の高まった場所について、授業の導入と同様にシールで印を付け、児童の視点を学級全体に共有し、自他の考えの違いなどに気付き、ワークシートを活用しながらまとめ、自分の見方や考え方を広げる。

- 授業中の児童の発言や感想、学習シート、教師の指導、授業後の児童の意識の変容に関するデータの収集
- 収集したデータを統計分析やテキストマイニングにて分析

(2) 結果

- 見方や感じ方（※）の広がり

授業後のアンケート調査（対象：第3学年児童35人、時期：令和6年9月11、18日）では、作品に対する見方の広がりには、94%の児童が実感できており、感じ方の広がりには、95%の児童が実感できており、おおむねの児童が見方や感じ方（※）を広げることを実感できた。

※ 見方や感じ方：小学校学習指導要領解説図画工作編（平成29年7月）では、「造形的なよさや美しさなどを感じ取ったり考えたりし、自分なりに対象や事象を味わうことができるようにすること」と解説されている。

- 指導の工夫の効果

どの活動（指導の工夫）が見方や感じ方に効果があったかを調査するため、授業後の追加アンケート（対象：第3学年児童34人、時期：令和6年12月18日）を行った。

アンケート結果の各活動の分布に着目すると、児童の学ぶ意識が高かった「絵を描く活動」に見方や感じ方の広がりがやや高いものの、指導の工夫①（視点の可視化）、②（焦点を絞って作品鑑賞）、③（ICT機器で作品鑑賞）が、一定の影響があったことが示された（図3）。

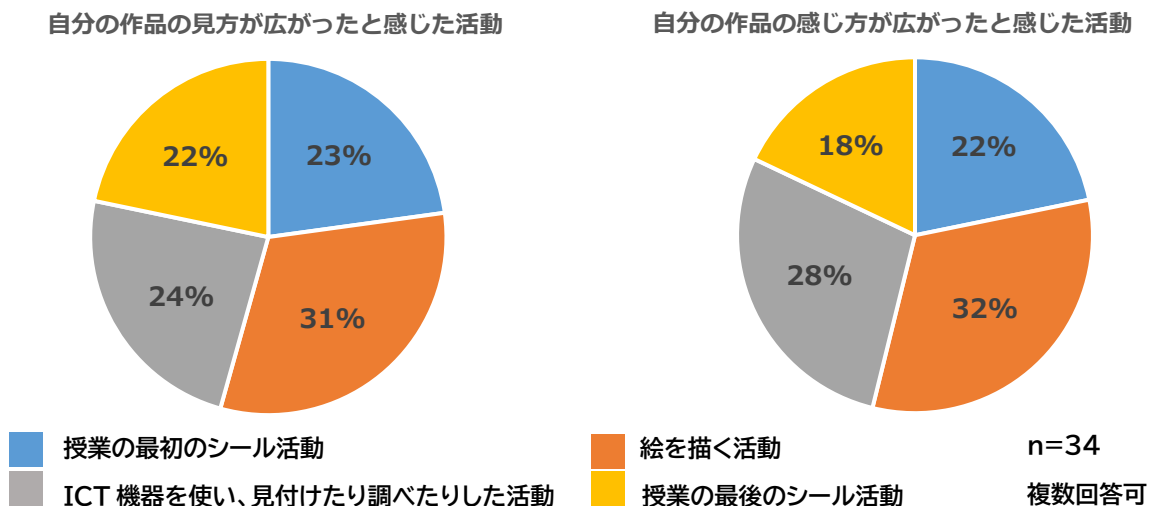


図3 児童の作品の見方や感じ方が広がった活動の割合

○ 児童の見方や感じ方の広がり

児童の授業後のアンケート記述から、児童の見方や感じ方の広がりについて、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析とは、テキスト内の単語同士の共起関係、つまり特定の単語が他の単語と一緒に現れる頻度やパターンを視覚化し、単語間のつながりやパターンを明らかにする手法である。

円の大きさは、出現回数が多い単語ほど円が大きくなる。線の太さは、線で結ばれている単語同士の関連性が強いほど、線が太くなる。

「作品を最初に見た時に気付いたことや面白いと思った事は何ですか。」という質問では、児童は、作品鑑賞時に、「面白い、思う、形、色」など、〔共通事項〕を中心に作品内の具体物や色、量に関して、考えを広げていることが示唆された（図4）。

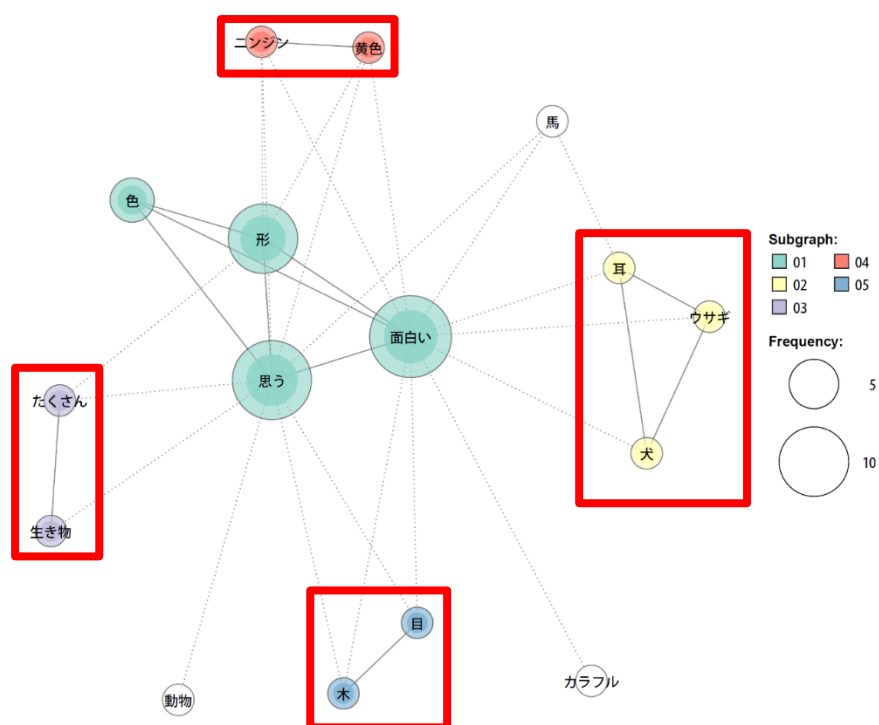


図4 授業後の児童の見方や感じ方の広がりに関する共起ネットワーク分析

○ 授業前後の見方や感じ方の変容

検証授業後の児童の変容を検証するため、検証授業前後の鑑賞活動時の記述についても、共起ネットワーク分析を行った。検証授業前（令和6年6月）の児童は、「かわいい」、「すごい」を中心に、形や色、量に関して、考えを広げる傾向があった（図5）。

一方、授業後（令和6年11月）の鑑賞活動時の記述では、具体的な色や形、作品の箇所に関連する記述が増加し、「かわいい」、「すごい」は、具体的な記述から独立した（図6）。このことから、児童の具体的な色や形、作品の箇所に関連する、見方や感じ方の広がりが示唆された。

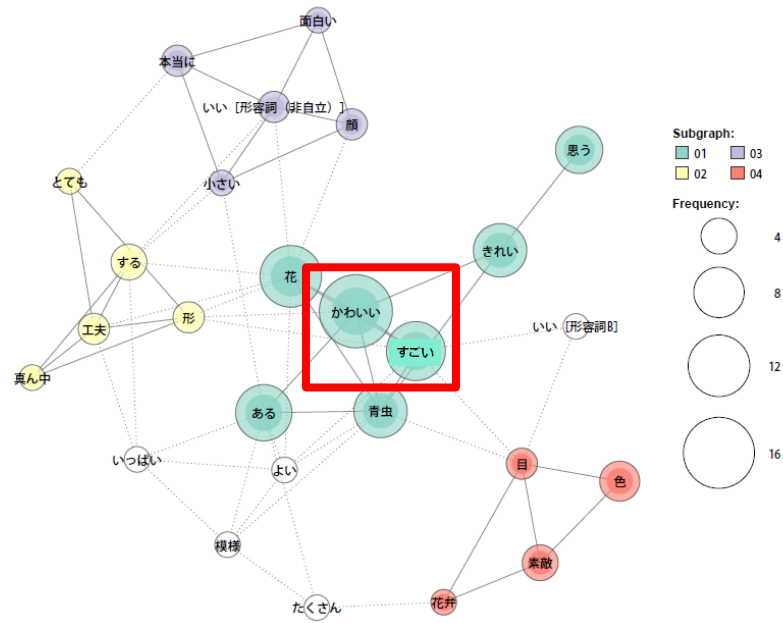


図5 検証授業前の鑑賞活動時の記述に関する共起ネットワーク分析

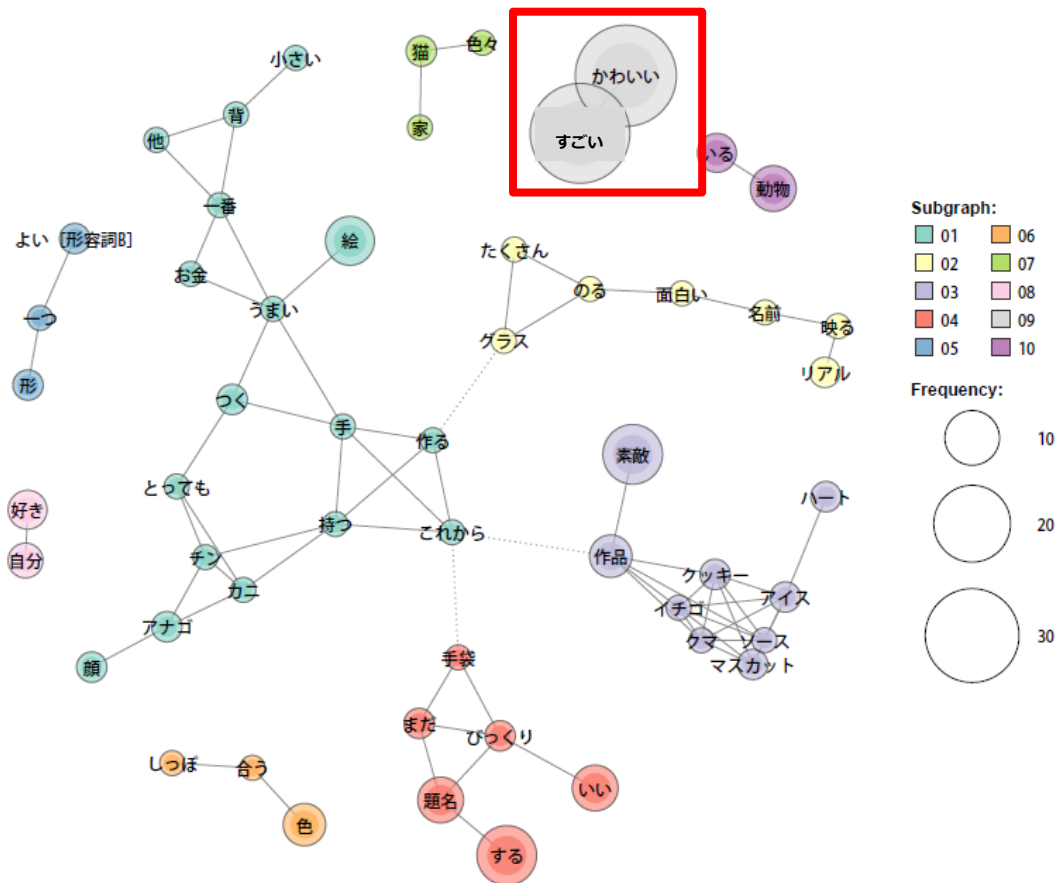


図6 検証授業後の鑑賞活動時の記述に関する共起ネットワーク分析

○ 児童の関心の変化

児童の活動から、指導の工夫①、②の分析を行った。児童の作品への関心の変化を捉えるために、児

児童は作品の関心の高い部分に、授業の最初は赤、授業の最後は緑のシールを貼り付けるよう指導した。

授業前後の図を比較したところ、児童は授業の前後で赤と緑のシールが重なる、友達が見付けた場所に関心を示す傾向よりも、緑のシールが独立する、新しい場所に関心を示す傾向が見られた。友達が見付けた場所と新しい場所の差を明らかにするため、統計分析を行った（図7）。

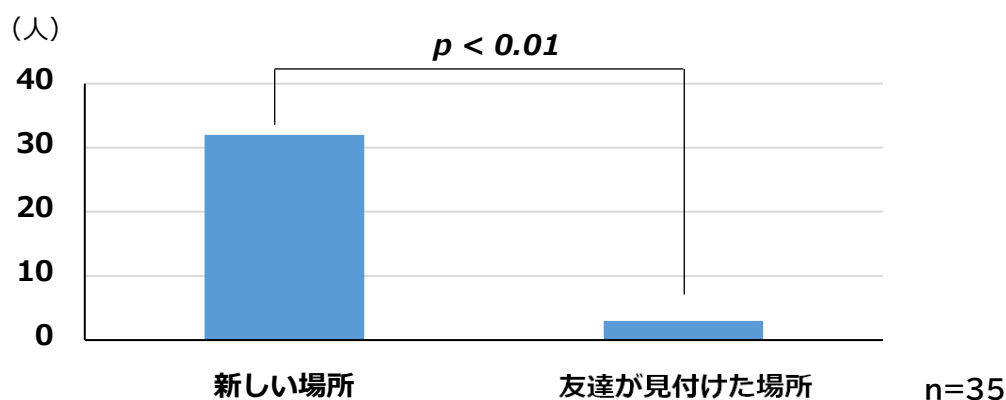


図7 授業前後の児童の関心の変化

緑のシールが新しい場所に貼られる「新しい場所」と赤と緑のシールが重なる「友達が見付けた場所」に分け、その差を分析した。分析の結果、新しい場所と友達が見付けた場所には、有意差が認められた。指導の工夫①、②は、新しい場所へ、見方や感じ方を広げる傾向が見られた。

指導の工夫①、②で見られた探索行動は、目新しさや物珍しさを求める「新奇性への欲求」や「知識欲求」といった要素が影響を与えること、ポジティブな感情は、より多くの要素を探索する傾向を促進することが、先行研究から明らかになっている。このことから、指導の工夫①、②は、児童の鑑賞に対するポジティブな感情を創出し、新奇性に関連する見方や感じ方の広がりが示唆された。

第4 研究の成果

基礎研究、調査研究、開発研究、検証授業の結果と考察から、指導の工夫から明らかになった成果及び児童の傾向を以下に示す。

○ 児童の成果

- ・ おおむねの児童が、検証授業を通じて見方や感じ方を広げることができたと実感した。
- ・ 指導の工夫①、②、③は、児童の見方や感じ方を広げることについて、一定の影響があった。
- ・ 指導の工夫①、②は、児童の鑑賞に対するポジティブな感情を創出し、新奇性に関連する見方や感じ方を広げることが示唆された。

○ 児童の傾向

- ・ 児童は、「面白い、思う、形、色」など、〔共通事項〕を中心に作品内の具体物や色、量に関して、考えを広げている。
- ・ 検証授業後の児童は、具体的な色や形、作品の箇所に関連する見方や感じ方が広がること示唆された。

第5 今後の課題

今後の課題は、次の2点である。第1は、言語活動、描く活動との関連についてである。本研究では、視覚的支援を基に作品鑑賞時の指導の工夫を行った。先行研究では、作品鑑賞時の伝え合いや他人との考えの交流等の言語活動を通じて、児童の見方や感じ方は、広がることが示唆されている。今後は、本研究との共通点や相違点を比較しながら、指導の工夫について検討を行う必要がある。

第2に、鑑賞時の教師の支援についてである。検証授業後の鑑賞活動の観察では、「すごい」、「かわいい」など、限定的な語彙による交流の姿が見られたことから、教師が鑑賞時の児童の理解を整理する支援の必要性が明らかになった。今後は作品鑑賞時における具体的な教師の支援について検討を行う必要がある。